

昭和四十八年四月二十六日 講演

「近代文化の行き詰まりとその思想的転換」

日本大学教授 高山岩男先生

諸君も名前はご存じかと思いますが、第一次世界大戦の後に世界中で読まれた有名な本に、ドイツ人のシュペングラの『西洋の没落 Der Untergang des Abendlandes』という本があります。ちょうど第二次世界大戦の後にイギリスのトインビーが盛んに読まれた如く、あるいはそれ以上にこのシュペングラの本は読まれたのであります。実は、そのシュペングラの本を若い時にトインビーが読みまして、彼の言葉によれば、まるで雷に打たれたような衝撃を受けたということであります。そのシュペングラの思想をトインビーが受け継いでいるわけであります。第一次大戦後にシュペングラが読まれ、そのいわば弟子筋に当たるものが第二次大戦後に読まれたのであります。

それで、シュペングラという人が『西洋の没落』という本を通じて何を語ろうとしたかと申しますと、実は人類の文明というものには死があり、文化も滅びることがあるということを説いたものであります。文明というものは、死があるどころか、無限に進歩向上を遂げて、絶対に没落するとか死滅するというようなことは無いのだ、という考え方がヨーロッパの近代十八世紀、十九世紀を通じてひたすら説かれてきた思想であります。日本の憲法等が出来ている根本の思想は、西洋の十八世紀の啓蒙哲学であります。その啓蒙哲学の中心思想というのは、人類は無限に進歩するということ、ひたすら進歩を説いている思想であります。

ところが、非常に詩人的なシュペングラが、人類の文明には没落があり、死があるということとを根本に説いたわけであります。かつてギリシャ・ローマの古代文明というものは寿命が尽きて終に亡び去ったものである。その華やかな時代から没落の時代まで相当の歳月は経ておりますが、人間性を本当に完成に導いて行くような文明を、彼はドイツ語で「クルツール Kultur」と呼び、そうしてそれが何百年か後になると寿命が尽きて漸次亡んで行く、この時期を「シビリザチオン、シビリゼーション Zivilisation」という文字で現したわけですから、人類の文化・文明というものは、クルツールという非常に調和した人生に奉仕するような精神豊かな文明・文化から、人間が疎外されて、ひたすら機械の中で虫のように生きていく、いわば、文明社会の中で、ノマドという牧の神の如くになって、そしてやがて亡んで行く古代においてギリシャ・ローマの文明が最後に没落して亡んだように、今や十八世紀、十九世紀の本当に優れた文明というものは、もう時機を過ぎてしまつて、今日はシビリザチオン、シビリゼーションという没落の過程に陥っているのだ。ヨーロッパというものはやがて滅びる。もう死期も近いという事を書いたのであります。このシュペングラの本は実は大戦中に既に出来ていたのであります。戦時中にもかかわらず出版が出来なかつたので戦後出版をみましたところ、昔風の言葉で言えば、実に洛陽の紙価を高からしむるほど読まれたものであります。第一次世界大戦というものは、人類史上はじま

つて以来、初めての地球的なユニバーサルな世界戦争であったわけです。これがまた近代的な機械技術の進歩によって、途方も無いような凄惨な戦争となったのであります。こういう悲惨な凄惨な戦争を数年戦った体験を持つている人類が、ヨーロッパというものは、やはり没落するかという感慨にうたれて、この本が当時ひどく読まれたわけでありませぬ。

しかし、人間というものは利口そうに見えましても、死を覚悟する、没落を覚悟するというところまでは、なかなかまだ参れないと見えて、その後いつの間にか文明の没落ということをお忘れまして、またぞろ文明というものは進歩して行くものだという具合に希望を持ち、またこれに期待をかけて生きて来たのであります。しかし二十年もたらずしてまた第二次世界大戦になり、第一次大戦以上の凄惨な戦争を経過して終わったのであります。それで第二次大戦後にまた文明というものは死滅するぞというシユペングラウの思想を受け継いだトインビーが読まれたわけでありませぬ。元来日本には、文明の死を謳歌するような思想は歓迎せられないで、ひたすら進歩するという古い観念に捉われて来たわけでありませぬが、どうやら文明もおかしいぞ、という文明の死を予感されるような事件がぼつぼつ出て来たのは疑いのない事実であります。殊に文明の進歩というものから

「未来学」というようなものが出来て、つい昨年か一昨年あたりは京都で、人類の将来に何か光り輝くようなことを言っていたが、その秋から今度は公害が自然を汚染して人間の生命を没落に導くようないろいろな害悪が出て来た。空気も吸えない、水も飲めない、魚も食えないというふうな状態にはいつた。こういう公害は今日依然として続いておりますが、この公害からくる不安、恐怖というものから、文明の無限進歩という観念がちよっと力を失いはじめて、さすがの呑気な日本人にも、やはり文明というものには没落があるのかと言つて、今日は少しく悲観的な考え方の方に捉われてきているやに見えるのであります。とぼけた進歩観念で浮ついた状態にいるよりは、やはり人類の大きな生命の一環が何所かで狂つてしまひ傷を受けて、この生命の流れが何所まで続いて行くのか、という不安にかられていたほうが、まだ危険状態を脱出して行く希望が持てるように、私は思うのであります。実は人類の文明というものについて、シユペングラウはクルツールという精神豊かな状態から、いわば機械の中で人間が疎外されて亡んで行くようなシビリゼーション——このクルツールとシビリゼーションをはっきり分けるのはドイツ流の使い方、イギリス人やフランス人はこういう使い方をいたしません。シビリゼーションとかシビリザチオンとか

いう一つの語しか普通は使いませぬ。シユペングラウふうの区別は、ゲートルからあるそうでありませぬけれども——とにかくドイツ人風の精神豊かなものをクルツール、そうして機械的・物質的・科学的になつて、人間というものがその豊かな人間性を喪失してしまふような状態をシビリゼーションという具合に、シユペングラウの考え方を取つておきますならば、クルツールからシビリゼーションに行くという行き方も一つであります。けれども、もう少しきめ細やかに考えますならば、このクルツールといわれませぬものは、まだ宗教的な神聖と神聖感情を失わずにいる段階にいます。そして、こういう宗教的な神聖感情がすっかり失われはじめて、全く唯物的な世俗的な価値になり切つてしまつた文明、これがシビリゼーションだということがみられるのであります。いまそういうきめ細やかな文明の発達段階論を申し上げている余裕がありませんから、これは省略しますけれども、とにかく文明というものは宗教的な神聖感情を動力として生まれながら、やがて世俗化してそして没落して行く。神聖な感情を失つて世俗的になつて行く時に普通の人の目から見ますと、文明燦然として見えるように見えるわけでありませぬ。鉄筋コンクリートの百階建てだの二百階建てだのという建物が出る。いかにも文明燦然とするかの如くに見え

るわけですね。道路も立派になる、高架道路もつく、自動車が増える。まことに文明というものが開けて行くかの如く見えますが、これが全く没落の兆候でありまして、実は落陽の美、太陽が西の海に没する時はまことに奇麗なものであります。その落陽の美のようなものが、一時人の心を捉えるものでありますけれども、確かに文明というものはそれを末期として死滅して来たのが歴史上の事実であります。

今日、シュペングラーが、第一次大戦後に近代ヨーロッパの文明というものは將に没落の過程にはいつていると予言的に述べたことは、何としても否定できない厳然たる事実のように思われるのであります。今、日本人が公害と申しておりますもの、つまり自然環境、これらはつきり外的自然環境と申しておいたほうがよいと思いますが、そういう外的自然環境を散々汚染して、そこから人間に事を及ぼすような公害というものが発生している。これが今日大変な問題になつていっているわけですが、一体いつ頃からこういう自然環境汚染の害毒が生まれ出たものだろうかということを考えてみますと、これまた詳しい研究を要するのではないかと思います。私のような哲学者をやっている者がほぼ考えるところでは、大雑把な言い方ではございますが、道具という技術の段階では殆ど公害などという害はないのであります。

機械という段階に進んではじめてそろそろこの公害が現れたものではなからうかと思ふのであります。では一体道具と機械をどう區別するかという面倒臭い問題が出てまいります。先ず大体人間の力を動力源としている、或いは自然の力でも、川の水の流れとか、風即ち風力や水力を使つて動力源としている簡単な物は、これを道具と申してよいでしょう。水車だの風車だのを使つていた時代にあつては、自然界汚染の公害などというものは絶対になかつたのであります。やはり第一次産業革命、ニュートンの力学、それから蒸気を動力源としたあの産業革命、この頃からそろそろ出始めたかも知れません。例えば、自然のミネラル、これを製錬する時に硫黄が発散してゆくようなことによつて、硫黄の公害というものが出はじめたことは確かでございますが、しかし、先ず大雑把にこれをみますならば、産業革命の蒸気を動力としていたような時代には、公害がたとえあつても殆ど問題にならない程度、ネグリジブル (negligible) であつたのではないかと思ふのであります。そういういたしますと、マクロスコピカル (macroscopical) なニュートンの物理学や力学が技術に応用されていた段階では、公害などというものは殆どなかつたのではないかと思ふのですが、前世紀の末、放射能が發明される、或はエレクトロニクスによつて電子の

世界が解つてくる、そしてミクロスコピカル (microscopical) な微視的な世界の物理化学フイジコケミカル・サイエンスというものが発達して、そしてそれがテクノロジとなり、そして産業に利用されるようになってはじめて、今日いわれるような公害というものが姿を現してきたのではないかと思ひます。これを大きな実例でいうならば、その時代からはじめて人間が自然を人為的に造りはじめたのであります。人造自然を作りはじめたのであります。合成繊維、合成金属という具合に、自然にはないような新しい繊維なり金属なりの新しい物質を、人間が進んだミクロスコピカルな物理化学の技術によつて作り出した。こういう段階から徐々に公害というものが発達して来たのではなからうかと思ふのです。DDTというもの、われわれは終戦後の虱だらけの時代にこれをアメリカ軍にかけられて虱が全滅したとか、悪い昆虫が死んだとかで大いに喜んでいたわけでありましたが、昆虫を殺してしまえば、その昆虫によつて生きていた動物は、いつの間にか死滅してしまうであらうし、その昆虫を食物にしていた他の動物、又それを食物にしていた別の動物は絶滅に瀕するであらうでしょう。結局AがあつてBがあり、BがあつてCがあり、CがあつてDがあるというふう無限の連鎖をなして生命というものが循環していたそのどこか

を、ジェノサイド的に、種族絶滅的に合成品をもつて駆逐した結果、米も沢山穫れるようになった、果物もすばらしいものが穫れるようになったと喜んでゐる時に、徐々に癌によつて蝕まればはじめたのであります。人造自然というものを人間が創り出し、合成品を技術によつて作り出した時から、実は公害というものが、発生しはじめたのではなからうかと考えるのであります。こういう点は理工系の人は一つ綿密に調べてご覧になったらよいと思ひます。まだ学説などというものはございませぬ。今日のような公害汚染というものがいつ頃から出て来ただろうかということをご丁寧の研究したら、これは大論文が出来ますよ。

とにかく、そういう具合にして、第二次世界大戦後の技術革新というもので、人造自然の製作というものが進歩して、公害というものが加率的に増してきたように私は思うのであります。ついでに申し上げておきますが、私達は先年、例えばスフなどというものを代用品と言つていた。ナイロンも本当は生糸の代用品ですね。ところが自然の生糸よりも良い人造のナイロンが出来て、代用品が本物を駆逐しはじめた。これは面白いことだと思ひますね。公害というものの中の一つの進歩と思うのであります。代用品が本物を駆逐する。われわれが今日台所へ行つてみましても解ると思ひます。天然自然の物は

随分少なくなりましたね。人造自然の物になつてきたでしょう。木が焼ける程度なら、いくら煙に巻かれてもすぐに死ぬようなことはなかつたのであります。この頃はもう火に焼かれる前に、煙で窒息してしまふでしょう。みな代用品がそういうことをさせるのです。そして人間の社会にありまして、だんだん大衆社会になりますと、代用品程度の人間が本物を駆逐して、本物の代わりになつてゐるという、誠に驚くべき時代になつてゐるのであります。これは誰が悪いでもない、みんな科学の罪なのです。実は有難い世の中になつてゐるようによつて、何だか文明というものが知らぬ間に逆の方向に進んでゐるといふ具合に、人も不思議に不可解に思ひはじめ、漸く文明というものは有難いもののみとはいへないで、大変な代物だといふ具合に気づきはじめてゐるのではないかと思ひてあります。

ところで、今こゝういふ面から、どういふものが公害の始めであり、どういふものが公害の種類として挙げられるかといふことを綿密に研究することは、学問上の研究として面白いから自分でやってみなさいと申しましたが、われわれはもう少し別の視点に深く眼光を追つてみるのではないと、本当の公害の原因といふものは分らないように思ひます。人間が梅毒といふものに冒されたとしますと、皮膚のあ

ちこちに腫れ物が出る。これを一つ一つ手当をやつていても決して梅毒は治らない。血を清めなければこの梅毒といふものは絶対に治りはしない。同じように、こゝういふ公害が起きた、ああいう公害が起きたと一つ一つの公害を潰して見たところで、決して近代文明社会の公害といふものは無くならない。又新しい公害が出て来るに違ひない。そういう一つ一つの公害の現象といふものの背景に、或いは以後に、公害を生み出して来る一つの大きな文明的原因があるのではなからうか？ 文明といふものは決して経済的な現象ではない。産業的現象でない、企業上の現象でもないのだ。実は現代文明の特徴的な、文明的現象である。シュペンゲラーの言葉を使うなら、クルツールの現象ではなくて、これはシビリゼーションの現象である。こゝう考えてみますと、今日自由世界であるか共産世界であるかを問わず、低開発国であるか先進国であるかを問わず、すべて近代西欧文明で生きている民族は、何か大きな自然汚染の公害といふものに襲われてゐるわけでありませぬ。そうすると、本当の原因は実はこゝういふ近代西欧の文明文化を生み出したその底にある哲学に、大きな過ちがあるのではなからうかといふことに発想が向いて行くわけでありませぬ。こゝう考えてみますと、やはり間違ひはもつと深い所にあるのだ。実は自然征服とか、自然改造とか

いう近代西欧文明の理念、理想にどうやら過ちがあるのではなからうか、ということに気づくのであります。実際「自然征服」、これは多くの自由世界が使った言葉であります。スターリン時代から共産国が「自然改造」という言葉を称えはじめた。スターリンなどは、非常に自然改造政策を考えまして、世に吹聴したものであります。シベリヤをもつと暖かい所にして人の住み易い処にする。そのために北極に流れ出ている水をもつと南の方に流すとか、砂漠を植林によつて森林地帯にするとか、いろいろなことを吹聴したものであります。一体これが成功したのか失敗したのか解らず、その後は何とも申されておりません。実は幸い失敗したのではなからうかと思うのであります。これがもし成功していたならば、今人類はどれほどひどい公害に遭つていたか分からないと思うのです。何だか知らないけれども、学者の計算するところでは、北極の氷が溶けて水になったら大変なことになる。むしろ東京などは海の底になるわけでありますから、自然改造とか自然征服とか、いい加減な考え方によつて自然を散々壊しはじめたことが、これが今日公害といわれるものが出てくる本当の原因であろうと思うのであります。そういったしますと、もう一歩突き込んで自然征服とか自然改造とかを動かした根本的哲学の理念とは一体何ぞや、といえますと、

これは思想史や哲学史を習つた人は覚えているだらうと思ひますが、近代西欧の人間至上主義、人間絶対主義、人間中心主義の思想であります。これがルネッサンス以後何世紀かかかつて本當に熟して、近代西欧の自然征服、自然改造の文明を生み出し、今日のこの燦然とした没落文明を作り上げたのであります。一切の存在は、外的自然環境、その自然の土の底にある地下資源であれ何であれ、一切はわれわれ人間のために存在しているに過ぎない。これを湯水の如くに消耗しようとする勝手である。こういう思想であります。世界の中心はわれわれ人間でござる、との人間中心主義。人間というものは万物の霊長であつていわば地上の神である。神の座に坐つた人間こそ、地上における絶対である。一切の存在はわれわれ人間のためにある。これが近代西欧の観念論だけではなく唯物論にも、プラグマティズムにも、経験論にもみな共通に流れている近代西欧の一番基本的な哲学であります。この近代哲学の上に自然改造をしてみせようとした。そして今日の環境汚染の技術から産業というものが栄えまして、しばらくするとそれで人類が亡びるかも知れないような危機線上へと、今日は突っ走りはじめています。

新聞を読んでいる諸君は気がついただらうと思うが、つい先だって、ニクソンのエネルギー

―教書というものがアメリカの議会に送られたのであります。私もアメリカというところでエネルギー、特に石油というものが困つた状態に入っているということは存じておりました。現ニクソン政権がアメリカの石油のみならず、石炭或いはオイルシエル等一切のエネルギーというものを、一体今後どうするのであるうかとかかなり期待をもつて、あの教書を読んだのであります。実に絶望感にうたれたものであります。なるほど、アメリカというものは困っている。困っている直接の原因はペラボウに石油を使うところにある。これは世界の三分の一近くをあの一国で使うのです。その次はわが日本らしいですね、湯水の如くに使つておりますね。われわれ人類の先祖は植物の種を少し保存しておいて、その種を植えて百倍千倍にしてこれを取るといふ農耕、農業を古くから考えていたわけですね。更に家畜というものを生産といいますか、子を産ませてこれを労働力に使ひ、或いは肉として喰うといふことを古くから考えていたわけです。更に近年は漸く海の魚類を果てしなく乱獲することはよろしくないといふことで、いわば地上で農業を開拓したように、海の中で魚類を開拓してゆくといふことを実際に発明し実行している。これが文明としては当然の正しい道だらうと思うのであります。ところが、そういうような再生産というのが絶対

にきかないのが、申すまでもなく地下資源であります。石油、石炭、その他ミネラルというものは、何千万年かかるか、何億年かかるか知りませんが、まず再生産不可能な物であります。であるならばこれは貴重な資源であります。天がわれわれに恵んだ資源でありますから、われわれの子孫の時代に使えるように無駄使いをすることなく、国際的に協定でも結んで適当に使うてゆくということを考えればよろしいのに、資源はわれわれ人間のためにあるという途方もない人間中心主義から湯水の如く使っているわけですね。いかに地球が広いとはいえ、有限な球体でしょう。そうすれば資源も必ず有限であつて、これが五十年で無くなるか、百年で無くなるか、或いは五百年で無くなるかという程度の差に過ぎないのであります。今の計算では、どうやらこの調子で湯水の如く使つていくならば、数十年をまたずに無くなるというところらしいですね。私はこの文明の大問題に直面してアメリカたるものが何かもう少し高邁な人類生き延びの政策を考えていくのかと思つたが、そうではない。もつと掘り出す方法を考える、もつと輸入する方法を考える、更に新しい原子力その他のものをもつと開拓する。そこから出てくるいろいろな公害は、アメリカとソ連が情報交換をやつて公害を無くしようというふうなことを一生懸命計画して、こ

れをやるに議会で送っているだけでありまして、このような文明の有り方では、人類の滅亡は近い。こういうような哲学が何一つないのに驚いたことあります。

一体、われわれの時代、世代、ゼネレーションに、われわれの子孫ということを少しも念頭に置かないで、われわれの時代に一切の自然資源というものは喰い潰してもよいのだというのは、途方もない現世代利己主義・エゴイズムであります。こんなエゴイズムが一体許されるものでしょうか？ 個人個人は、これを何とも思つていないのです。ですからこれは形而上的利己主義といつたほうがよいかも知れません。形而上であろうとなかろうと、こういう利己主義というものがどうして許されるのでしょうか。これが人間中心主義、人間絶対主義の哲学からひとりでに流露している結論でございましょう。断じてこういうことは許されるべきものではありません。

これもまた新聞を読んでいる諸君はご存知の筈であります。家畜の飼料というものが世界的に少なくなつていゝ。そこでイギリスとソ連でしたか、そこらあたりから石油から蛋白を作つて家畜の飼料にしようということで、それをわが日本でもやろうとある企業家が農林省に申し出たとたん、街のご婦人方がそこからはえらい毒が出てくるかもしれない、そんな蛋白

を食つたならば、またえらい公害が出てくるかも知れない、やめてくれ、という反対が効果を奏しまして、企業家はさすが利口ですね。役人は馬鹿ですから、いやそういうものは人間の食料ではなくて家畜の飼料だから、人間の食料ならとめる法律もあるが、家畜の飼料は製造をとめる法律がない、とききましたね。法律馬鹿とはこれです。人類が亡んでも、日本の憲法を守れという日本の馬鹿と同じですね。とにかく企業家はこんな不信の念の強い石油蛋白を企業にのせて製造したところで売れっこないというので、辞退いたしました結果、幸い日本では石油蛋白を造るといふ笑話はなくすみました。何たることだと思つた。これはみな根本の精神は、一切の存在はわれわれ人間のためにあるという、人間中心主義のルネッサンス以後の西欧の近代哲学と、これがやがて自然征服、自然改造となり、そうして徹視的な現象に関するフイジコケミカル・サイエンスの発達、これが技術化されて今日の公害というものを生み出しているのだから、梅毒で皮膚の外に出たようなところを一つ一つ処理したところで治まるものではなくして、その間には別な所から、知らず識らずに人類および一切の地球上の生命の流れが毀損されている。やがては人類のこの生物的生命は毀損されて消えて行くのかも知れないということが、起きはじめてい

るのであります。従つて一番の根本は人間中心主義、人間絶対、そうして自然を改造しよう、或いは征服しようとする勝手だという誤つた文明の行き方を根本から悔い改めて行く、そうして自然環境と人間というものが調和し合い結び合つて生きて行く、これが生命保存の唯一の道であり、正統な道である。こういう哲学の方向へ道を変えて行くのでなければ、結局亡んで行く。シュペングラの言つた西欧文明の没落は、愈々スピードを増して行くかも知れない。もし西洋の牧畜民族がどうしてもこの新しい道をたどることが出来ないとならば、東洋の方からこういう哲学を出してもいいわけでありまして、とにかく今日は文明が非常な危機に直面しはじめています。その根本の原因はサイエンス、テクノロジーという所だけにあるのではなくて、実はそれを動かしている魂、哲学、人間中心主義、人間絶対主義、そういう所にある。そしてこれが地下資源等を湯水の如くに使うという事によつて愈々速度を増して、公害だらけの地球にいつつあるわけであります。よほど勇敢にこれは是正しなければ、何ともならない所に差しかかるのではなからうかと思つてます。私どもの年齢になれば、もう既に死んだ頃だからよいのでありますが、諸君はまだ生きておりますから、事実大問題です。よろしくこういうところを深く考えて行かなければなりません。

さて、そう申しておいて、ではわれわれが今日憂うべき不安を感じすべき公害というものは、外的自然環境というものを征服し、汚染することから公害が生じてきている。では、公害だけに止まるのかと、つきつめて問うてみますと、人はまだどうも気がつかないようでありますが、有る。有るどころではない、今は外的自然、アウター・ネーチャーと、いわばインナー・ネーチャー、内的自然というものを征服し改造し、そうしてこれを汚染して、人類が実に大事な自然というものを壊しつつある。ヒューマン・ネーチャーを、人間の内部的自然を散々壊して人間そのものが一個の解体状況にはいつつあるのではなからうか。こういうことに何となく気がつきはじめたわけであります。今主として肉体的生命の不安というものを公害から取り上げましたけれども、いわばインナー・ネーチャーを破壊するような、魂に関する公害が至るところに西欧文明の中から起きはじめているわけであります。これをもつとわれわれは自覚して深刻に分析もし、深く反省もし、この面でも公害というものを転化して公益に再び転じて行く。シビリゼーションからクルツールに、もし行けるならば逆戻りして行く。こういう道を考えるより他にないと思つ。一体、それは何だといえますと、私は自然改造に代わ

つて社会改造、自然征服に代わつて社会制度改革です。革命というような社会革命の観念は、誰でも知つておられるように十九世紀のヨーロッパにはじめて姿を現しましたが、これが若し人間中心主義、自己絶対、人間絶対という同じ西欧近代のルネッサンス以後の哲学に根を持つているものならば、これはヒューマン・ネーチャーとインナー・ネーチャーを汚染して、こっちの方からも人類を滅亡の方向へ押しやつていけるのではないかということがいろいろ氣づかれてくるのであります。

人類は確かにルネッサンス頃から外的な自然というものを発見した。一部の文明文化史学がいうように、確かに中世と違つた点がそういう所に見出されましょう。そうして一部の思想家が申しますように、十九世紀は今度は自然の発見ではなしに、社会の発見の世紀であつた。確かにそう言われればそのとおりでありまして、ソシアル・サイエンスといわれるものが十九世紀にはじめて学問的な体裁を備えはじめるわけであります。と同時に産業革命以来、徐々にある課題が熟してきたわけでありますが、そのある課題がまだ本当に熟さない結果、人類に気がつかれなかつたのであります。けれども、特定の俊敏な天才の中にそのプロブレム、課題、問題があるということが氣づかれた。これがいわゆるソシアル・プロブレム、社会問題、

社会を発見した西欧の十九世紀の人が、今度は産業革命以来の産業社会の中に広汎なソシアリズム・プロブレム、社会問題が潜んでいるということに気がつきはじめたのである。そういう社会問題の自覚の次にはどうしたらよいかという解決の構想が考えられてきたわけでありませぬ。この構想を先ず総括して申せば、ソシアリズム・社会主義と言つていいようなもので、これが十九世紀にヨーロッパの先進国でぞろぞろ出はじめたわけでありませぬ。マルクス主義もその一つでありませぬ、決して最終的なものではないが、これはまあ大きなエポックを画したことは否定出来ない事実であります。ここに十八世紀あたりから始まった産業革命を転機として、人類は今まで感ぜられなかつた社会問題というものが大きく感得せられるようになった。放つて置けない問題であるということが自覚されるようになった。そして、どうしてこの問題を解決したらよいかということ、いろいろなソシアリズムと、総括して社会主義といわれるような思想なりイデオロギーなどが出てきたわけでありませぬ。

ここに、革命というものが、フランス革命以後の革命という問題が、脚光を浴びて大きな問題となつてきたわけでありませぬ。実は人類の古くから、東西とも国家が出来た時から革命はあるようでありませぬが、その中でも支那の漢民族に

は誠に偉い人が居たわけでありませぬ、春秋戦国の前の古い時代から革命哲学というものがあつたのでありませぬ。プラトン、アリストテレスにも革命の理論、議論はございませぬ。ギリシヤ、ローマでも革命はいくらでも行われたのでありませぬが、実は天命革まる、天子というものがその天命を受けたものですが、然るに、その天子から天命が去つて、新たに天命を受けた者が暴君を退治するのが革命であるというようなことで、革命是認の哲学が古くから成立していた。孟子の中などにも立派な言説が見られるのでありませぬが、こういう革命と政治革命の思想が古くから支那にあつたということは、驚くべきことだろうと思ひませぬ。

いま、革命のいろいろな思想が何所にどうあつた等ということは抜きにしまして、そういう昔の革命に対して、政治革命、ろくでもない暴君のような奴が政治をやつているので、民がみな苦しんでいる。これを討伐せよという革命はよいのだという政治革命というものも、公益こそ多かれ、公害というものは知れたものだったと思ひませぬ。それは朝廷・ダイナスティーというものが代わるという時には、家が焼かれたり、宮殿が灰になつたり、人もチャンチャンバラバラやりまして、多少の被害を蒙るものと思ひませぬが、そんな公害というものは知れたものでありませぬ、史上歴史上に残つていゝる大革命とい

うものは、東西とも公益のほうが多かつたのではないかと思ひませぬのでありませぬ。

ところが、天命等というものを基本原理として、われわれ人間というものが絶対である、万物はみな人間のために存在するのである。こういう近代ヨーロッパの自我中心、人間絶対の哲学の上から、その人間が構想する最善、ベストな社会経済秩序だと信じ込むものを世の中に実現しようとして、現在の社会経済の秩序、この頃の言葉で言うならば体制、こういうものを革命で目茶苦茶に潰してしまつて、自分等が考えるベストな社会秩序を作るならば、世は忽ちに、或いはやがて、地上の天国のように豊かな、何一つ不足なく、また何の道義的不正もないよい社会が出来るのだ。さあ、社会革命をやれ、ということになると、これはえらいことだと思ひませぬ。これは大変な公害が出てくると思ひませぬ。道具の時代には公益はあつたが、公害はなかつた。機械と技術の段階においてはじめて公害が顔を出したのだと思ひませぬ。いや、その機械文明のまだ初期には、まだそうではないが、人間が自然を製作する、人造自然を創り出すと、合成物という新しい自然物を人間がクリエートする段階にはいつて、はじめて公害というものがあつて、今日、文明人が愕然としていゝる。ちょうどそれとバラレルに、政治革命という段階は道具の段階に匹敵するものでありませぬ、たとえ

破壊だの殺人だのということが行われたとしても、公害などというものは知れたものであり、ネグリジブルなものであったと思う。ところが、人間がベストと考える社会経済秩序を革命の破壊を経てあれ、とにかく実現するならば、即刻にか、やがては地上に天国が実現するといふふうなソシアリズムに立ちますと、いろいろな面で途方もないのであり、実に近代ヨーロッパの文明の基礎によった、誤れる哲学の欠陥が直ちに出てくるに違いないと思うのであります。

このことを例えば共産主義、マルクス・レーニン主義についてみますと、非常に歴然としている。一体、近代革命の最初の大きい記念塔的なものはフランス大革命でしょう。これは自由・平等・友愛というきわめて抽象的なイデオロギーとして革命が起こった。ちようど戦争が、第一次世界大戦、第二次世界大戦とも、自由諸国の米・英は、デモクラシーの安全というのが戦争目的です。こんな抽象的な戦争目的を立てますと、いつになったら戦争を終えることができるか。またドイツも日本も、ヨーロッパ新秩序とか、大東亜共栄圏など、途方もないでかい戦争目的を掲げましたから、どこまで行ったら矛を収めていいか解らなくなってしまう。人類の智慧が共に頽落していた証拠がそこにある。戦争目的というものは出来るだけ小さいほう

がよいのだ。例えば、シレジア(英 Silesia 独 Schlesien)の此処の所を少しくれんか。いや、やるわけにはいかん。それじゃいつちようやるか、という戦争は二、三か月で終わる。シレジヤが欲しい、その鉄が欲しいんだよ。そして自分が負けました、と言ったら残念ながらシレジヤをやるんです。国は亡びはしないのです。もつと賢明な戦争は、我こそは桓武天皇何代の誰それで、と名乗りを挙げてやる戦争であれば、一日経っても一人を斬ることが出来ないですよ。なんぼ上手な奴だって二、三人位なものですね。その戦争たるや、誠に文化的な戦争であつて、敵の姿も見ずに殲滅してしまうような残酷な戦争と違うわけです。まあ人類も智慧が衰えた証拠には、大東亜共栄圏の途中で妥協して、和平に移る道を閉じてしまつて、最後に無条件降服まで戦い抜いて矛を収めたわけです。しかもその矛を収めた後、第二次大戦後どのような平和が来たかといえば、一日といえども平和は来なかつた。如何に戦後秩序、戦後処理というものもが誤つていたかを実証するものであります。ちようどそれと同じように自由平等友愛などという革命の理念を掲げて革命などをやりますと、いつになったら革命が成就するのか解らないでしょう。遂に長期の革命になりまして、そのうちにナポレオン戦争になり、ナポレオン皇帝の出現となつたわけで、何のためにフラン

ス革命が行われたのか訳が解らなくなるのですね。だから革命の始まりも本当は解りません。極めてドラマティックに、バスターイーユの監獄を市民が襲つたというのがフランス革命の始まりだと言つてもよろしい。だけど、いつ終わったというと解らない。

さあ諸君、ロシア革命は終わったのですか？ 一九一七年第一次世界大戦の終末期にケレンスキーが起こし、やがてレーニンがフランスから帰つて十月に革命を起こしている。このプロレタリア革命だと称せられる革命を起こしたのが一九一九年、それから五十年経つたのです。いつロシア革命は終わったかということは、恐らく諸君は考えないだらうと思う。いつ革命が終わつたのだと真面目くさつて問題を出されると、えーと、スターリンの段階で終わったんじゃないか？ なんて気もしますけれども、そのスターリンが第一次五か年計画のスローガンとして掲げたのが、「アメリカに追いつけ、そしてアメリカを追い越せ」と、そして漸くその段階で共産主義の門戸に到達するわけであります。ところが、スターリンが死んでも、遂にアメリカに追いつき追い越すことが出来ませんね。第二次大戦後、スターリンの死後、フルシチョフがアメリカまで出掛けて行って、そして人々を笑わせながら言つた言葉を皆様覚えていらっしゃるかもしれませんが、「われわれはアメ

リカに追いつき、そして追い越して、アメリカを埋葬してしまう。穴を掘って埋めてしまうということですよ。笑った奴も居りましたけれども、深刻な顔をして恐怖感に襲われたアメリカ人も居ったことでしょう。もうそろそろ共産主義の世の中になる筈ですね。ところが誠に遺憾残念至極なことではありますが、生産があまり上らず、とても西ドイツおよび日本の比じやなく、更に飢饉等に襲われて、金を放出しては農産物を買っているような有様です。いつになったらアメリカを追い越し、そして共産主義の社会になるのか解らない。諸君は覚えがないかもしれませんが、中共、北朝鮮が共産化したとき、ときに、中共は「われわれはイギリスに追いつき、イギリスを追い越す」と言い、北朝鮮は「われわれは日本に追いつき、日本を追い越す」と言ったものです。それがこの頃さっぱり言わなくなりまして。ところが、日本の方がこの頃はGNP世界第三位にのし上がってしまった。一体どちらが経済政策において優秀なのか。それは第二次世界大戦で灰になった日本と西ドイツの例で、既にもう決定されているわけでありませう。ですからドイツチャーというソ連研究の有名人が、『未完の革命』、ザ・アンフィニッシュド・レボリューション、未だ終わらざる革命という本を出している。これは本というよりも、オックスフォード大学で三回も講義をした時

の演題であります。アンフィニッシュド・レボリューション、これに意味がある。終わらざる革命、岩波新書では、何かロシア革命などというところばけた書名になっておりますけれども、著者の意図していたのは、「アンフィニッシュド」、ロシア革命未だ終わらず、である。しかし私にいわせると、未だ終わらずではなくて、永久に終わらざる革命ではないかと思えますね。今この理論を、例えばトロツキーあたりからお話し申し上げる理由はないから省きますが、共産革命というものが成功するには、世界の有力な資本主義の大国がほぼ同期に革命を起こしてコミニズムにならない限りは、絶対に成功しないのです。ところがその資本主義の大国というものが、西欧或いはアメリカを見る限り、また日本、西ドイツを見る限り、どうも共産主義になる兆候はない。何となれば、共産主義的生産方式より自由主義的生産方式のほうが、やはり優秀だからでしょう。ですから、世界革命というものが成就しない限り、ロシアに共産化はないというところから、永久革命というものをつ捉えたのがトロツキーであったのですから、永久革命というか、終わりのない革命というのが、ソ連のロシア革命時からあったので、決して今俄かに出てきたものではない。これが政治革命ならば、暴君がなぎ倒されて新しい政体に代わって建ち、治安が回復されたとすれば、

その途端に革命は終わった。社会革命は政治革命と違うのであるから、社会経済の約束された秩序が実現されて、地上に約束された天国が現出されない限り、終わる道理はない。ですから、未だ終わらざる革命ではなくて、これは原理上終わらざる革命、完成せざる革命であると思えます。その理由はちよつと申し上げましたけれども、永久に終わらざる革命ではないかと思う。しかし、永久に終わらざる革命とは一体どういうことであるか。つまり革命としては失敗であったということではないかと思う。これが実は人間絶対主義、人間中心主義という近代ヨーロッパの自然環境を汚染して今日、人類が非常な不安にかられて、何所かに間違いがあるぞと予感しているのと同じ予感が既に一部に表れはじめています。

一つ、永久未完だということを諸君も考えてみるためにこういう説話を申しておきましょう。マルクス理論だと、ある程度は誰でも知っているだろうと思うが、ユダヤ・イスラエルの旧約聖書の世界史の考え方が影響しているのがあります。キリスト教民族は大体そういう主観の上に立っているのです。人類のはじまりは私有財産がない原始共産体という天国の時代なので、天国で嬉々として遊んでいた時代に当たるわけがあります。ところがアダムとイブが禁断の実を食って天国を追放されて以

来、人類というものは罪の歴史、墮落の歴史、ますます悪い歴史にはいつてきた。そしてイエス・キリストの十字架の受難という事件を転機として今度は救いの歴史にはいつてきた。最後の審判を転機として、今度は天国が再び実現される。パラダイス・ロスト。一回限りのキリストの十字架上の受難復活、それからパラダイス・リゲイン、もう一遍再興される。これで歴史が終わる。これが西欧の考え方で、西欧の歴史哲学観というものは、そのどこか一部位を精練されて今日にきているものであります。こういう神学的といえますか宗教的史観をそのままとっている例は案外少ないのですが、マルクスはそっくりこの宗教史観をそのまま継承しているのです。原始共産体の崩壊、これは私有の出現。これから人類の歴史は下り坂にはいるわけで、そして共産党宣言の最初の有名な文句がございましょう。「従来一切の歴史は階級闘争の歴史なり」と。ところが、革命が何遍も行われるが、最後にプロレタリア革命という、革命を永久にこの世から駆逐する革命というのが起きるわけでありませぬ。だからこれは一遍でいいのです。此処で国家は死滅する。そして家というような私有財産、子から孫へと伝えて行くような財産制度は無くなる。そして万人が能力に応じて、万人の欲求に応じた天国が実現するというふうに考えられている。

そこで諸君、考えて見給え。というのは、一切の欲望が満足されて、能力に応じて働き、欲望に応じて何でも貰えるような一切の不足欠乏が無くなったような地上天国の如き社会が実現すると、一体どうなるか。われわれ人類はこういうことを深く考えていない。そこで突拍子もないような例を出しますけれども、分かり易くするために誰でも知っている浦島伝説を思い出せばよいのです。浦島太郎が助けた亀の背中に乗せられて竜宮へ行ったでしょう。所は海の中ということになっておりますけれども、奇麗なお姫様が沢山居り、そして鯛や鯉（ひらめ）、酒の肴はいくらでもあるような、つまり天国、われわれ男性共にとつては一切の欲望が満たされている五欲満足の天国極楽です。そこで浦島太郎が日記をつけたと考えると、まあ素晴らしい所だ。酒はおいしいし、見たこともない情景ですから、浦島太郎は真つ黒になるまで日記をつけるだろうと思う。五、六日つけたら今度は何かつけることがありますか？ 毎日起きて寝るまで同じ生活ですね。もうブランク状態になりますよ。本日無事、なんて書くかもしれません。もう、本日無事も面倒臭くなつて、ブランクではないかと思ひます。そうなるると三百六十五枚の日記帳も一枚と同じですね。三千六百五十枚、三万六千五百枚、いくら枚数が多くても、ブランクですから一枚と同じです。時

は消えて行く。時は無くなる。地球と太陽の相對計算による時はあるでしょうけれども、もう時は記録したり記憶したりする何ものもない。面白いおかしいことは何も無い。そうして今度は一切の欲望が満たされた時に襲い来る最後の苦しみというものが、これが「退屈」というものですね。この退屈というものに襲われたならば、身の置き所もないでしょう。この位のことば諸君も実感出来る筈ですね。ですから浦島太郎は、別嬪のお姫様達が「帰るな帰るな」というのをすげなく振り切つて、「やはり娑婆の方がよい、苦楽相半ばする娑婆こそ生き甲斐があるわい」と言つて、とうとう帰つて来た。歸つてみると、何百年か前のことで誰も知る者がなかつた。これがなかなか哲学的に意味が深いですね。われわれ人間は、欲は随分深いけれども、あまり智慧はあるとはいえない。苦の無い楽だけの極楽世界というものを昔から構想し、これを実現しようとする人種までいる。革命家までいる。しかし、極楽というものを、仮に実現したといたしましても、一週間位過ぎると、これは極苦だと逃げ出すことになるわけです。この地上における相対的な存在であるわれわれ人間の世界には、一切楽のみで苦しみは微塵もないという楽はない。そういう楽の世界になれば、苦が一切消えると退屈が苦になり、極苦に苛まれる。ですからこの人生の理というものを深く

考えてみるならば、社会経済秩序が天国を実現するとすれば、そのために革命も多いけれど、一体革命がいつ終わるんだという問題を考えてみるならば、永久に終わる道理がない、永久未完の革命である。永久未完の革命とは誤れる革命であつたわけでありませう。フランス革命に既にその兆候が現れているのでありますが、人間が増長慢に陥つて、人間の考えるベストな経済秩序さえ実現するならば、一挙に地上は天国になる等という考え方は、如何にそれ自体において甘つちよろい子供じみたものであり、人生の深い智慧から離れたものであるかが解るわけであります。ですから、此処に永久未完の革命として、永久に動乱が持続するような社会になることが考えられるわけでありませう。何としても先ずそこに行く前に世界革命を起こさなければならぬ。こういうために、一体第二次世界大戦後、何処かに平和があつたかといひますと、少しもなかつたといふことを先程申し上げました。しかし実に見ておきますと、ソ連が共産主義によつて天国を実現しようとする、今度はアメリカがデモクラシーの安全といつた手前、デモクラシーで史上に最善の世界が実現されるかのような錯覚が日本にひどく伝わっているわけでありませう。二人の救世主が出てこれが言い争うために人類が救われぬのが現実の姿ではないですか。二人の平和のエンゼ

ルが出たから、世の中に平和がないのですよ。どうしてこういう馬鹿なことが起きるかといひますと、結局いま申しました本当の人生の智慧というものが近代文明中に欠けているからであります。

そこで、最後にもう一つ問題としてこういうことをお考えいただきたいと思つたのです。この前から、国労働のストで騒ぎが起き、暴動も起きはじめております。われわれ位の年輩の者は過去の史実を知つておりますから、そこらみますと、大変な危機状態にはいつているように思ひます。このままでは済まないようなことが、随所に出はじめてゐる、非常に憂うべき状態に日本は突進してゐる様に思へるのであります。今はその問題は一応措いて、ストというものは何だといふことです。諸君も労働法というものを研究するならば、歴史的に深く物を考へて、労働法のなり立ちと、今日におけるメタモロフォーズと言つていいような変化と、二つをよく考へて研究を進めてもらいたいと思つた。

先ほど戦争のことを申し上げましたが、このナポレオン戦争というものがヨーロッパで国民戦争、ナショナル・ウォーというものを生みだした最初の戦争形態であるといふことは諸君もご承知だろうと思つた。それ以前は、王朝の私兵傭兵、これは大金のかかる兵隊でありませうが、こういう者を備つて温存しておいて、王

庁および少数の貴族の利益のためにやつた戦争に過ぎなかつた。それ以前は更に封建諸侯の利益のために専門武士団が争つた戦争であつたわけでありませう。これはみんなスケールが小さかつたのであります。ところがはじめてナポレオンがデモクラシーを活用して国民を徴兵で兵士に祭り上げて、自由・平等・博愛という革命をつぶそうとして入つてきた国々と国民戦争をやつたのがナポレオン戦争であります。これがナポレオンが常勝將軍であつた一番の秘密の鍵であつた。こてんこてんにやられたプロシヤ、イギリスの方は、今度はナポレオンの奇知をまねて、ナショナル・アーミー、国民軍といふのを作つて近代化したから、今度はナポレオンの天才の秘密が相手にも伝わりましたので、ナポレオンは破れてセント・ヘレナ島に流された。

ついでだから申し上げておきますけれども、このナポレオン戦争に当たるものが日本では明治十年の西南戦争です。これが歴史的に非常に意味が大きいですね。薩摩の専門武士団が、百姓町人の小作が鉄砲の弾丸ぐらゐでわれわれにどうして勝てるんだという意気込みで政府の軍隊と戦つた。その百姓町人の小作から出来たナショナル・アーミー、国民軍が専門武士団をこてんとやつつけて勝つたのが西南戦争であつた。それ以来、武士団の謀叛といふかク

ーデータは遂に起きなかつたのであります。大變歴史的に意義のあるいわば日本におけるナポレオン戦争みたようなものであります。ところが、このナシヨナル・アーミーによるナシヨナル・ウォー、国民戦争というものは、日本の場合、日清・日露も国民戦争です。この場合には、戦闘員が戦場で勝敗を決する戦争であつた。敵と味方が戦場で大砲を撃ち鉄砲を撃つて勝敗が決せられた。それ以前の戦争からみると、非常に被害、計画は大きくなつたけれども、これは今日の戦争からみると、まだチャチなものであつた。とにかく、十九世紀はそういうナシヨナル・ウォーの時代である。

ところが二十世紀にはいつて、一九一四年はじめて世界戦争が勃発し、次に三九年第二回目の世界大戦と、今日まで二回の戦争が起きたわけです。さあ、この世界戦争というものは実に残酷な凄惨な戦争であつた。第一次世界大戦が既にそうであつた。第二次大戦に到つては、これは筆舌には尽くし難いほどの残酷な戦争であつたといつていいですね。何故か。これは兵器が非常に近代化された、新兵器が出来たといふことが一つです。ところが決してそれだけではない。その新兵器というものは、前線において非常な消耗量なのです。私等も昔の中学や高等学校で、正課で実弾射撃を一年に一回位撃たされた。五発位をこうやってドーンと。あの時

代の鉄砲の弾丸の消費量等は、一日吞まず食わずで撃つても知れたものです。その後機関銃でちよつとやれば、これは大変なものでしょう。こんなものを何万何十万発撃つと銃身が焼けますから、別の銃に取りかえる。同じように速射砲だの、大砲だのというものがみんなそうです。つまり、日清日露の頃からそう隔たつてもいないのに、第一次世界大戦になつてみると、前線の消耗量というものが大変なものです。ところが、それならもう戦争をやめて弾丸が来るまで待つておればよいようなものですが、どこい新しい兵器を作つたり、新しい機械化を起こしたように、近代のテクノロジーはマスプロという方式を集めて、どんどん前線の消耗の要求に応じて作り出せるようになった。こうなると、どんなことが起きるかという、前線において戦闘員と戦闘員が戦つて限りの戦争と違つて、勝敗は前線では決らない。一旦負けても弾丸を補給して出て来る奴が今度は勝ちます。だから結局軍需生産をやつて後方の非戦闘員が働いている工場、大砲や機関銃や弾丸を作つているところを爆撃で潰してしまつて、非戦闘員を殺戮するのでなければ、戦争の勝敗は決らないということになつたわけです。この戦略爆撃というものが第二次世界大戦においては、西ドイツと日本に対して実に物凄く行われた。最後には一発で広島も長崎も消えて

無くなるというような非戦闘員殺戮、つまり都市をこの世から消すという途方もない兵器が使われてしまつた。ハーグの平和會議という有名な會議が、前世紀の末から今世紀のはじめにかけて行われた。ここで陸戦の法規が國際法としていろいろ決められました。戦闘は戦闘員と戦闘員の間で行われるべきものであつて、非戦闘員には危害を加えるべきものではない。既に戦闘力を失つた捕虜、戦傷病者は、これまた人道的に遇されるべきである。決して殺戮の対象としてはいけない。こういう人間の倫理性が、ちゃんと國際法として決められていたわけです。それが一九〇〇年、今世紀の始めです。ところが、十年経つた第一次世界大戦ですら、すっかり反故になつてしまつた。なぜ反故になつたかと申しますと、今申したとおり非戦闘員を殺戮するのでなければ戦争には勝てないといふように近代の科学技術がしてしまつた。ですから、カイザー（ドイツ皇帝）が悪いんだ、いや、ウイルソン大統領が悪いんだと、そういう個人の將軍や政治家の罪ではないのです。西歐文明の罪です。ですから第一次大戦の時にも戦争裁判をやらうとしたが、オランダのある宮廷がカイザーを匿まつて、遂に戦争裁判は行われずに済んだ。だが、第二次大戦後には、西ドイツと東京で戦争裁判が行われた。そしてイン・ザ・ネーム・オブ・シビルライゼーション、

文明の名において、ウォー・クリミナル、戦争犯罪人を裁いた。これをみると、まだ非戦闘員に危害を加えることは非人道的であるという観念は残っている。ですが、一番残虐な行動をして、国際法違反のこゝをやったのは他ならぬその裁判をやっている戦勝国なのです。今後もし核ミサイル兵器を無制限に使う戦争というものがあったと仮定するならば、戦闘員と戦闘員の戦う戦争でしょうか？ 戦闘員を殺戮してそして交戦意志を放棄させるような戦争でしようか？ ではなくて、実に非戦闘員、人民、市民、国民を地上から抹殺してしまふような殺戮に重点が置かれる戦争が出てくるでしょう。戦争というものは、本当は敵が戦おうという意志を失わしめることが戦争なのであり、兵器というものはそれを失わしめるような威力を持つていゝるものが兵器で、戦争抵抗意志を捨てなくてもよいというものは兵器にはなりません。ですが、戦争意志、抗戦意志、抵抗意志どころか、人間そのものをみな蒸発して無くすというやうなもの、これはウェポン、兵器ではないでしょう。こういうものを無条件に使うやうなものは戦争ではない。つまり、文明はこの短期間に極度に進んだ結果、遂に兵器にあらざる兵器を作りはじめた。従つて第二次大戦の終末における原爆投下をはじめとして、今度は戦争にあらざる戦争を生み出したのである。幸いにし

て避けられたが、核ミサイルを使う戦争の危険はあった。例のキューバ封鎖の時に、フルシチョフがUターンしなければ、亡くなったケネディ大統領の弟のロバート・ケネディが言ったやうに、われわれはもう原爆戦争をやつたと。Uターンして戦争を避けなければ、たしかにやつたでしょう。しかし、戦争を避けて、ホワイト・ハウスとクレムリンの間にホット・ラインがついて、米ソはどうしても戦えない。つまり、人類は戦闘員と戦闘員の戦争を何千年だか続けて来たが、二十世紀にはいつて、非戦闘員の殺戮を目的としているやうな、戦争にあらざる戦争へとメタモルフオシスを起こして、遂に今日は核ミサイル兵器という、もはやどうしても兵器とはいえないやうな、いわば自殺と他殺を同時に進行、矛盾した、戦争としては意味のない戦争を生み出すやうになった。これが客観的な事実であります。いいですか。私がいい加減に諸君を誤魔化しているとは、諸君も思わないでしょう。事実なのです。

そこで、ひるがえつてストというものを考えて見給え。スト権というものは、一体何処の国の憲法が労働三権の一つとして保障したか？ これも一つの研究題材です。或いは憲法で保障しないでも、法律でもって最初にこれを保障しようとしたのはいつ頃、何処の国であつたか。これも研究の材料です。労働者の経済的地位を

豊かにするために、資本陣営の搾取を減らすというところから、つまりデモクラシーの理念の上から、ソシアリズムの運動としてストライキ権を認めるといふことから、西欧の進んだ国で出たのだらうと思ひます。それでは、その時代はどういう時代か。その時の戦争が、戦闘員と戦闘員が交戦する戦争であつたやうに、ストとは資本家と労働者との間のバランス・オブ・インタレストというか、バランス・オブ・パワーでストライキが行われた。その時に、非戦闘員に当たる人民大衆、国民が、何等かの程度では影響をうけ、被害を蒙つたでしょう。しかし一般大衆への迷惑は事実ネグリジブルだといふ点から、戦闘員同士の交戦のやうに労使の間をとらえて、ストがジャスティファイされたのだと思ひます。ところが、文明社会が漸次進んだ結果は、何もチャーチルの責任だ、ルーズベルトの責任だといふのではなくて、文明社会の発達の結果、銃後の無辜の婦女子が殺戮の対象となり、そして凡そ産業力を破壊し、それに従事している非戦闘員も殺戮するといふことが大目的になつたやうな戦争と変わつてしまつた。そのやうに、いま、鉄道とかトラックとかの輸送業、更に電信電話その他ガス電気等、われわれ文明生活の日常に欠くべからざる仕事に従事している労働者が、ストの名の下に停止させるといふ行動に出た時、一体どういふことにな

りますか。これは労使の間の闘争ではないでしょう。人民を人質にしている。あのパレスチナ・ゲリラと同じですね。人民を人質にして、その人民の中には、自分等労働者を除いた他の労働者は皆、入る。更に、一般市民の全部を含んだようなこういう人を人質にして、「止めれば困りますよ、死人も怪我人も出るかも知らんよ。だから言うことを聞け」という具合に、人民を人質にして脅迫して意志を通そうとする。また、日本の国鉄のように親方日の丸だから、なんぼでもストをやろう。停車場が壊されようと、焼かれようと、自分の腹は少しも痛まない。だからストをやるほうも、来年は参議院だということ、親分がストを差し置いて九州まで選挙運動に行くと、又別のほうの親分は、困ったものだ、困ったものだと言うておるだけで、何一つ真面目にやろうとしない。迷惑を蒙るといふより、労働権、生存権まで毀損されているのが、実は国民大衆です。しかも大切なことは、労使の間の、ちようど戦闘員と戦闘員の間の戦争のような形ならば、そうして第三者の人民大衆に与える毀損、ダメージの量はネグリジブルであるというようなものならば、これはかつてジャステイファイされた。ですが、今や核戦争は戦争ではない、こういう戦争は絶対に認められないといわれる時代に、ちようどそれと同じように非戦闘員、つまり当事者にあらざる国民

大衆に危害を加えようという計画が、はじめから入っているようなストというのは、われわれ歴史をやるものからは、とても考えられない。それはもはやストにあらざるストであります。ですから、今日の日本では、つい先日、正規の労働問題に対する二つの最高裁の判決がありました。それも説得力のない判決ですが、けれども政府の声明も説得力がない。ストをやるほうもこれを受けて立つほうも少しも真面目でなく、自信がない。ただ言うのは法律に違反するから間違っているというだけで、こういうものでは説得力はございません。何故それが法律で禁ぜられているか、ということ。この歴史的倫理的な根拠をもう少し深く探り出すということは、今日当然のことだと思っております。そうしますと、先程から申し上げているとおり、戦争形態がかくも歴史的に変わったのだ。暴力概念というものが旧刑法のように身体肉体に苦痛を与え、傷を与えるものが暴力であつて、直接傷も苦痛も与えないものは暴力ではないというならば、これは吊し上げも暴力ではなく、例えばケストラが『真昼の暗黒』という本の中で、あるソ連の高官が無実でありながら偽りの自白を強要される。あの修羅図の状況を書いておられますが、ああいう拷問も、何にも肉体を傷つけたり苦痛を与えるものでありませんから、暴行・暴力ではないという結論になる。

途方もない話であります。いま、暴力概念・暴行概念は昔の概念では割り切れない。ちようど戦闘員と戦闘員が戦場で戦つて、国際法的にはこうしてはならないというような、あの戦争ではなくて、国際法等はへっちゃらで、非戦闘員を殺すことが戦争目的であるという、こういう大変化が生じたのであります。同じように歴史の進展は、いわばストというものをジャステイファイした約百年以前の考え方は、もう今日では無修正では通用しない。この認識が大事だと思つてあります。だから、如何なる手段を用いるかということによつて、これはもうストというものではなくて、ストをはみ出ているもので、人民に対する犯罪であるということに成り得るわけでありませぬ。よほどこういう点は、歴史上、倫理上の認識を改めなければならぬ。狭い視点だけに捉われずに改め、これを考へて行くのでなければ、これは大変なことになりはしないかと思ふ。諸君もお気づきだろつと思ひますが、イギリスも斜陽化して相当の年月が経ちますが、あの賢明なイギリス国民も近年は愈々斜陽にはいつているわけで、遂に彼等はデモクラシーの模範国でありながら、デモクラシーの行き過ぎといひますか、変化を気づかないために、海運ストを中心として、やはり経済的に斜陽化しはじめています。民主国は民主国に徹して、民主主義もデモクラシーも変わりつつあ

るという認識を欠くならば、それで滅びるわけ
 であります。日本なども、もっと早いかも知れ
 ません。民主主義といいますが、デモクラシー
 の観念が本式のデモクラシーよりも極端であ
 りますから、そういう近代のグレート・パワー
 であつたような国も、民主主義の行き過ぎから
 遂に経済的に破綻をしいはじめのを見ている
 のから日本は何も外国の真似をしなくてもい
 いだろうと思います。日本人は天平奈良の昔か
 ら、外国を理想国と考えて、日本というものは
 誠に価値のない国であるという途方もないコ
 ンプレックスを持つて来た。これが明治以後ま
 すます強くなりまして、何でも西洋と同じにし
 なければ恥かしいという劣等感が充ち満ちて
 おりますけれども、こんな馬鹿な話はない。日
 本のデモクラシーは日本流でよいし、日本のス
 トは日本流のもので、何もILO（国際労働機
 関）に教示を仰ぐ必要はない。よろしくこうい
 う点は、歴史はかくの如く、一世紀或いは一世
 紀半の間に根本的に変わっているのだという
 こと。これは戦争にも現れ、或いは暴力暴行と
 いう概念、またストにも現れてきている。この
 認識の上から新しく考え、法というものを改正
 しなければ、これは大変なことになるぞと、ち
 ようど公害によって人類がいつの間にもやら蝕
 まれて、気が付いた時には、もう癌の如きに救
 済の道なしという段階にはいつてしまう。その

前に徹底して考えてみたらどうかという使命
 を若い諸君はよく考えていただきたい。

大変長い間、ご清聴ありがとうございました。
 （拍手）

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が
 用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、
 当時のままといたしました。